



# 教職大学院

## Newsletter

# No.27

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2010.12.25

## アイデンティティの時間 / コミュニティの時間

長期実践研究報告の意味

手業の時間— (秒, あるいは数十分の一秒)。一連の運動の時間— (数秒, 十数分から数時間)。ストップウォッチで計ることのできる時間の枠内の行動とそれにまつわる反応については, 多様な関心から, 多くの分野で膨大な研究が重ねられてきました。多くの授業研究, 教育実践研究もまた, こうした時間の枠内, そしてそれに対応した方法で実践を捉えようとしてきました。

しかし一方で, 人の成長, その人らしいアイデンティティが形成され発展していく過程に対応する時間は, そうした時間の枠をはるかに超えた, 長いながいライフプロセスであることを, わたしたちは自分自身の人生から, そしてわたしたちが人生をかけて支えようとしてきた人々の経験から実感しています。ひとり一人の人生の物語, ライフヒストリー研究は, その長い歩みと起伏をわたしたちに伝えています。

手業の時間, 運動の時間, 1時間の授業の展開。それらの明確ではあっても極めて断片的な時間と, ライフヒストリーの時間の間に, いくつもの時間の層が暗黙のまま横たわっています。操作的に測定・分析できる「行動」やアンケートによって短時間に切り取られた「意識」が, 人の成長の核となる人生の時間系と切り離されて研究されている限りは, いくら膨大な研究が操作としては重ねられようとも, その時間枠の限りでいくら厳密な方法がとられようとも, それは人の成長を支える教育研究としての意味を持ち得ません。その断片が, 人の成長過程の総体の中でどのような意味を持つかが明らかにされない以上, そしてその総体の展開の中でどのような価値を持ちうるのかを問わない限りは, それは教育研究としての意味を認めることは困難です。それはやはり断片的な行動や反応の測定・記述・分析以上のものではありません。

断片的な行動・反応の時間と, アイデンティティの形成の時間の間にあるプロジェクトの時間, その積層的な発展の時間, そしてプロジェクトを通してコミュニティが発展していくプロセスの時間の断絶は, 個々人の経験を暗黙の前提に置いてかろうじてつなげられているのかもしれない。しかし

それが個々人の実感, 省察を欠いた暗黙の経験知に依存している限りは, 学としての基盤を欠いているといわざるを得ないでしょう。二つの時間の層の間にある大きな断絶, その間にある実践の長い積み重ねとコミュニティの展開の時間へと問いを進めることなしには, こうした実践と研究の分裂と空転はやむことがありません。

一人一人の, そして協働のプロジェクトの展開を追い, そこにかかわる一人一人の成長と, その底にあるコミュニティが培われていくより長い過程を跡づけ直す。長い実践の歩みを語る記録であると同時に, その実践の歩みの省察と解明を通しての新しい実践研究の形が求められています。ドナルド・ショーンは、『省察的实践とは何か』の中でそうした長期的な実践研究の必要性を指摘しています。科学者としての基本的枠組み・ものの考え方を, 南米での地域開発の協働プロジェクトの実践経験を通して組み立て直していった一人のアメリカ人エンジニアの歩みを辿った後で, ショーンは, そうしたアイデンティティそのものの転換, そしてそれと密接かわるコミュニティそのものの展開を跡付ける研究の重要性を課題として提起しています。そしてそのためには「この本(『省察的实践とは何か』)の中で進めてきたことよりもさらに長期にわたる持続的・系時的な分析(a more sustained longitudinal analysis)が要求されることになるだろう」とショーンは記しています。(D.A.Schon, *The Reflective Practitioner*, p.275, 邦訳, p.294)

福井大学教職大学院における長期実践研究は, 何よりもまず, 新しい時代の学習とそれを支える学校を実現しようとする実践の歩みを伝えるものですが, 同時に, それをたしかなものとするためにも, 「長期にわたる持続的・系時的な分析」, 新しい実践研究への協働の挑戦でもあります。教職大学院の冬は, ここに集うすべてのメンバーが, 自身の実践と研究を省察し今後の展望をひらき著すために, 苦闘を重ねる季節になります。(Y)

### 内容

アイデンティティの時間/コミュニティの時間(1)

小特集 01: 秋の研究集会(2)

附属特別支援学校(2)・至民中学校(3)・丸岡南中学校(4)

他校の実践と研究から学ぶことの意味 川上純朗(7)

小特集 02: 福井大学教職大学院の取り組みに寄せて(9)

広島大学教育学研究科共同研究チームの福井大学教職大学院ヒアリングより

学校紹介: 西津小(12)・瓜生小(13)

本の紹介(14)

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(15)

# 小特集 01：秋の研究集会

10月から12月まで、校内での日々の実践と省察をふまえた拠点校の公開研究会が続きます。

実践の展開に表現の場を与え、公共圏へとひらく。それは実践者自身にとって、またそこに参加する私たちにとっても、実践を歩みを顧み、思考し、共有し、展望する大切な機会です。教職大学院のメンバーや修了したメンバーが、研究会の中心的な推進者として、互いの公開研究会に協力者としてまた実践の展開を受け止め、より深く探る参加者として、研究会を支えています。この27号、そして次号で、公開研究集会を特集します。

## 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 「2010年度公開研究会」開催報告

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 政井 英昭

10月8日（金）秋晴れの中、来賓の県教委の先生方、福井大学の先生方、そして県立の特別支援学校の先生方をはじめとする特別支援教育に携わる県内外の先生方の総勢200名を超える参加のもと、「公開研究会」を開催いたしました。今回は、福井県養護学校教育研究会の全体会を兼ねるもので、また、福井大学教職大学院の院生や教育地域科学部の学部生の参加もあり、盛大なものとなりました。関係の諸先生方のご理解とご協力に深く感謝いたします。

はじめに、小学部は2学年ごとのクラスでの「あそび」、中学部は「くらし」の環境・衣食・工芸の各グループ、高等部は「仕事」の焼き物・紙と刷り・畑の各班の活動を公開しました。

本校は昭和60年以来「生活教育」という発想を大事に実践に生かしてきました。また、平成18年には「培いたい力」と「領域」一覧表を作成し、「生活教育」で培おうとする力と活動内容を改めて明らかにしました。

また、一人一人児童生徒の実態やニーズに合わせてどう活動を行い、「自立と社会参加」につなげていくかを、ICF（生活機能分類…WHOが2001年に採択）の考え方を反映させながら実践してきました。

ICFは、ごく簡単に言うならば、その人の「個人因子」の特にプラス面を「環境因子」を調整することで活かし、「生活機能（心身機能・身体構造、活動、参加）」を向上させるということです。そのことをどう授業で行うのかというのが、今回の研究の一つの柱となっています。

もう一つ、エンゲストロームというフィンランドの学者が言う「拡張理論」に関してです。人の活動がコミュニティとのかかわりなどから拡張していく仕組みや、更に活動を拡張させていくためにどうするかといった「ノットワーキング」の発想についても、実際の活動事例に則して検討し、授業の展開に活かしてきました。

全体会では、全体研究助言者の松木健一先生から、「本校が行っている児童生徒の縦割り活動と生活教育やICFとの関係はどうなっているのか？」という質問をいただきました。「異年齢の集団ということが実際の生活を模してるといって生活教育の一方法であり、それは、ICFの人的環境調整が活動や参加のレベルを押し上げるということでもある」といった話をしました。松木先生が更にそれに補足してくださいました。

午後は、分科会。これも研究の柱となる部分で「縦割り分科会」という仕組みで実施しました。各学部の授業研究や事例研究を進めるに当たって、学部の担当者だけでなく、別の学部の教員と共に協働を進めるという研究スタイルです。

過去の2年間に、先生方一人一事例研究として児童生徒の成長事例を検討し、研究紀要にまとめてきました。その過程で、クロスセッションとして、学部を解いた縦割りの検討会を年に2回程度、行ってきました。

しかし、このクロスセッションは別の学部の実践を知ることにはつながるが、同じ集団での継続的な検討でないと思えないといった反省と、これまでに得られた学部の研究成果を小中高12カ年の中で検証する必要性から継続した縦割り分科会の研究体制が生まれたのです。並行して、小中高の各事例に渡る共通のテーマを見つけ、学部を越えて実践を深めることにしてきました。

今回の報告で、「実際に小中高がどう連携するとよいか参考になった」といった評価を多く頂きました。

次年度は、11月頃に「研究集会」として、ここ4年間のまとめを発表します。事例検討の積み重ね、学部の取り組み、縦割りの研究といった地道な歩みの積み重ねから、4年間を通した研究のテーマである「自分らしく生きる学びの創造」を現すことができたらと思います。

# 公開研究会をデザインする

## ー至民中第3回公開研究会を終えてー

福井市至民中学校 牧田 秀昭

(福井大学教職大学院)

去る10月29日は第3回至民中公開研究会。500名を超える参観者を迎えて無事終えることが出来たことを、参観の皆様、関係の皆様に対し感謝申し上げたい。当日、松木健一先生からは「違う dimension に繰り上がった」、ゲストの三鷹市教育長貝ノ瀬滋先生からは「学習観についてはっきりと筋を通して。それが最大の魅力であり特色である。教育の王道だと思う。」と講評いただき、手応えを得たところである。

前回はフィンランドからハッカライネン夫妻を招いての研究会であった。そこでは未来の学校や教師の果たす役割の変化がメインテーマであったが、今回はこのテーマを引き継いでいる。「中学校」という1つの枠の中だけで完結するのではなく、様々なネットワークの中で、新たにネットワークを編み込んでいく主体として中学校を捉えたら、きっと違った学校像が浮かび上がるに違いないと考えた。そもそも第1回から、「校長挨拶」がない。「生徒代表挨拶」なのだ。第2回目はいろいろな係を生徒が請け負った。生徒が「本音で語る」場面も設定した。院生の諸君や地域の方々も貴重なスタッフであった。第3回目はこれらをより広く深くしていきたいという願いが職員共通のものとなったのである。スタッフ証（これだけで人間が変わるから面白い）を首から提げた2年生は、役を粹に感じて働いていた。おそらく一生忘れられない思い出となろう。1分20秒だけステージに上がった1年生10名も同様である。

公開授業の後には授業研究会がつきものだが、当事者である中学生に授業について語らせる場面を設定したらどうだろうという案が出た。別な機会に小学生に授業紹介する取組は2年前から行っているが、折しもゲストが小中連携、コミュニティスクールのスペシャリストに決まったことで拍車がかかった。小中両方にとって互恵的な働きが期待でき、より緊密な小中連携を考えるきっかけになる（現にこの後小学校の先生方とより具体的な協議会を持った）。掲示物も生徒の手作り。アイデアは企画開発委員会を中心にどんどんでてる。これが本校の強みであるし、

子どもと同様「積み重ねがあつてこそ（貝ノ瀬）」である。実際、3年生たちは、準備そのものにはそれほど時間をかけられなかったが、どの教科も用意していたことを再生するだけの単なる発表会でなく、小学生の様子を見ながらその場で言葉を選ぶ、我々の授業スタイルに酷似していた。うれしくもあり恐ろしくもある。我々の授業がそのまま子どもにも反映されるからだ。

さて、「至民の生命線」である授業づくりにおいては、大いにチャレンジングな試みがなされてきたように思う。生徒の問題意識を大切にす「至民式問題解決型学習」をベースに、オリジナリティあふれる学習活動が工夫されてきていた。ただ、あの人混みの中で日常の姿を見せることは難しかったのは事実で、私自身、午前中の授業の方が生徒もののびのび活動できていたように思う（参観者は午前中からかなりの数に上ったのだが）。授業研究会の実施も含め、午後の提案授業の数や日程を見直す等が今後の課題となった。

公開研は移転開校3年目で3回目。毎年公開していく意義がようやく明らかになり、システムが整ってきたと感じている。開校前は、『新しい中学校づくりに向けての公開研究会』と銘打って、開校2年前に2回、1年前に1回開催した。私自身、至民中だけで計6回の公開研を企画してきたことになる。最初は、「なんでやらなあかんのや」という声が聞こえてきたし、全職員で創り上げたという実感は持てなかった。しかし今では「次は何が出来るだろう」と、公開研があることを前提にして実践を構築していこうという気運まで生まれてきた。3回ともご参会いただいた方にはその変化を実感いただけたのではないだろうか。私なども個人的に美術科「願いを形に」は今年はどんな展示を考えるのか、愉しみにしていた（もちろん実際は私の予想を越えていた）。イベントであってイベントでない、学びの本質を問い直す授業公開を土台としながら、「子どもも、教師も、保護者も、かかわる者全てが成長できる『学び舎』（塚田校長）」のあるべき姿を追究する公開研。公開研の持ち方そのものも提案する研究会としていきたい

し、それこそが「前例踏襲はしない」本校の真骨頂である。福井市教育長内田高義先生から今年いただいた言葉「至民はうまくいっている。見なくても想像がつく。」が普段のことになりたいものである。

最後に蛇足となるが、今回、私の最高の盟友である大橋巖教諭と一緒に公開授業ができたことを個人的に大変うれしく思う。共に歩んできただけに感慨深い。彼は娘様が参観に来られていたそうである。東海北陸技術家庭科研究大会の発表も兼ねた斎藤雅宏先生も奥様が来られていたようで、そんな話が聞けただけでも公開研ができて良かったと素直に喜んでいる。



「写真スタッフ」の生徒が撮ってくれた授業スナップ

## 平成 22 年度丸岡南中学校自主研究発表会報告

スクールリーダー養成コース 渡邊 朋重  
(坂井市立丸岡南中学校研究主任)

平成 22 年 11 月 2 日 (火) 自主研究発表会を開催したところ、県内はもとより、遠くは徳島や奈良、愛知といった県外からと、たくさんの方々のご参加をいただきました。本校は、研究指定もなく、あるといえば、拠点校として福井大学教職大学院からご支援いただいているくらいの、手作りの研究発表会です。拙い取り組みではございますが、その一端を紹介させていただきます。

本校は、県内初の教科センター方式として平成 18 年度の開校以来 3 年を一区切りとして自主研究に取り組んでいます。開校当初は、「教科センター方式の校舎を生かした教育を創造するにはどうしたらよいのか」というところからのスタートし、平成 20 年度からは、授業研究、中でも「探究型の授業」に重点を絞って研究を行ってきました。昨年度は、これまでの研究を踏まえ、次の点について確認して新たな 3 ヶ年をスタートさせました。

- ①授業づくりに重きをおいた研究の継続
- ②本校の特色である教科センター方式（全ての教科が専用の教室（教科教室）とそれに付帯するメディアセンターを持つ）を活用した教科指導の研究
- ③全教職員同士が互いに学び合う、協働体制による研究

そして「グループによる少人数での学び合い」という共通点を持ち、各教科でサブテーマを設けて、教科部会を中心として研究に取り組みました。また、異教科教員によるグループ（3～4 名×8 グループ）で授業公開、事後協議を通して「教職員同士の学び合い」にも取り組みました。

2 年次となる今年度は次のコンセプトを念頭に研究をすすめてきました。

- ①研究をイベント型から日常型へ  
研究発表会のための研究でなく、私たち自身、そして子どもたちのための研究とする。
- ②教科を横断した協働体制の構築を目指す  
教科を超えた取り組みで研究に幅をもたせる。研究授業を行う教科のみに負担をかけない。  
教科を超えた協働体制で、教職員全員で取り組んだ一体感を高める。
- ③授業研究の視点を指導者から生徒へ  
授業者に過度のプレッシャーを与えず、自主的な取り組みとするため。教科を超えた協働体制を取りやすくするため。生徒を教職員全員で見ている事で生徒理解・生徒指導につなげる。

こうしたコンセプトをもとに今年度は教科を横断した教職員同士による学び合いを研究の中核として取り組んできました。研究発表会で授業を行う教科を中心とした教員グループを 3 つ編成し、月 1～2 回の授業公開、事後協議をもとに、それぞれの教科の取り組みにつなげる取り組みを行いました。こうした教員グループで横のつながりを強化し、研究に幅を

持たることをねらい。教科を超えた連携で得た事を、教科部会で授業実践に生かしながら、研究に深まりを持たせたいと考えました。

	研究授業		
A	国語	国語科、社会科、音楽科、特別支援	9名
B	理科	理科、数学科、美術科	8名
C	英語	英語科、保健体育科、技術家庭科、養護教諭	9名

また、福井大学教職員大学院の拠点校としての連携もすすめてきました。本校は、平成20年度に制度が始まって以来、拠点校として連携を図りながら研究実践に取り組んでいます。今年度は4名の本校担当の先生方に、月1回の研究推進委員会および全体研究会（グループ協議にも）に参加していただいています。さらに、本校担当以外の研究授業教科の専門の先生方にも指導案作成にご助言いただくなど、いっそうの連携を図っています。

こうした取り組みを見ていただく自主研究発表会は、次のことにも心がけて開催しました。

○生徒の姿を見ていただく。（研究授業だけでなく、清掃の様子も公開しました。）

○参加者のみなさまとともに研究授業をもとにした研究協議を行い教員同士の学び合いを行う。  
今年度中核と位置づけた「教員グループでの取り組み」を振り返ると次のような意見が出ました。

○他教科の教員と話し合う事で教科の違いが認識され、教科の特質がいっそう明確になった。

○最初は他教科の事はよくわからないので、意見が出にくいのではないかと不安だったが、話し合ってみるとそれぞれの教科では出てこない発想や意見が多く新鮮な気持ちで参加できた。

○自分の教科では見られない生徒の違う表情や学びの様子を見る機会が増えて良かった

○実際の小グループでの話し合いの在り方をより具体的に検討していく必要がある。

○授業公開を持ってない事があり、指導案検討がグループ協議の中心となってしまった。お互いが授業参観する手立てを考えていきたい。

○異教科との協議が自教科を見つめ直すきっかけとなったが、他教科の取り組み内容を自教科に生かす事は難しかった。

自主研究発表会はゴールではなく、あくまでも通過点です。これらの振り返りをもとに、継続して取り組み、今後につなげていきたいと考えています。

最後にご参会いただいた方々からの感想の一部を記載させていただき報告とさせていただきます。

- ・今回の理科の提案授業では研究の柱がすべて含まれている。21世紀の授業づくりのヒントがあちこちにちりばめられていた。メディアセンターにヒントとなる情報が準備され、それを基に自分たちの力で実験をつくりあげ、グループ討議で班全員が説明できるまで高め、自分の言葉、表現で自信を持って他班の人に説明していた。まさに本校の研究テーマや目指す生徒像、授業研究の重点項目がすべて網羅されていた。
- ・生徒が自信を持って自分の言葉、表現を使って説明できていた。人に説明するには深い理解がないと難しく、そこまで班の中での深め合いが出来ていた証拠である。まさに新指導要領で強調されている活用力を育てる先進的な取り組みで今後の授業スタイルとして発信できる提案であった。
- ・イベント化しない公開授業のあり方に、本物の学力育成のポリシーが感じられる。言葉の力を育成するプロセスとしてのディバカッションが、他教科でも生かされていった成果に期待したい。聞く話す書くを通した活動の工夫が十分繰り返されていることの意味が理解されている。担任や仲間との信頼や安心の中で表現することの喜びが伝わってきた。
- ・現在教科は一人なのでメディアセンターや教科を越えた協働体制というものも大変心強いシステムだなとوراやましい限りです。ディバートのテーマで社会科と国語科で話し合うのは聞き応えがありました。
- ・掃除の前後の落ち着き、授業後の理科室で議論し続けていた3年生、「こんにちは～」と明るく挨拶する生徒、すてきでした。授業中も等身大で考えている姿がたくさん見られました。心が開かれているように感じました。
- ・とても清楚でよい雰囲気集団と感じました。グループの学習にも大変意欲的ですばらしい。  
清掃への取り組み方は、清掃指導の考え方を改める必要性を感じさせるものとなりました。
- ・おだやかでしなやかな生徒像がうかがえる。先生は指導者、生徒は指導を受ける者といった主従関係ではなく、ともに学びともに成長するといった関係がこのような生徒の雰囲気をつくっているように思う。清掃活動もすばらしい。ここにも学び合う環境の創造が見られた。

### 教職専門性開発コース1年 林 克磨

私は今回の自主研究発表会に、インターンの一環から丸岡南中学校のメンバーの一員として、創り上げていく段階から携わらせて頂きましたが、はじめから驚くことばかりでした。特に、教科を越えた横断的なグループをつかって授業案をねりあげるということに不安すら感じていました。正直なところ、私は社会科の教員が国語の授業を研究していくことなど無理だと思っていたからです。しかし先生方に交じって検討を重ねていくうちに、先生方の「生徒にこうなってほしい!!」という情熱が伝わってきて、その共通の想いが異教科グループを機能させることに気づ

かされました。誰か一人のリーダーが先を走って研究を進めるのではなく、先生方一人ひとりが協力し合って心地よい学校を目指していくのがこの学校の大きな特徴だと感じました。これは、先生方が普段から生徒と接することで得られた多様な視点を持ちよることで成り立っているのだと思います。これまで私がインターンをするなかで感じていた、先生方の子どもに正面から向き合う姿勢が生きた自主研究発表会だと思いました。そしてそういう教師の姿を感じてか、のびのびと学び合える生徒の姿がみられた自主研究発表会でした。

## 丸岡南中学校の自主研究発表会に参加して

### 教職専門性開発コース2年 中山 侑子

11月2日に丸岡南中学校の自主研究発表会が行われた。私は昨年度も参加させていただいたので、2回目の参加となった。研究主題が「学び合う環境の創造」ということもあり、教科センター方式の素晴らしい校舎で、生徒たちは自分たちの思い思いの時間を過ごしているようだった。

公開授業では理科を参観させていただいた。単元は3年生の「エネルギー」であった。内容としては、身のまわりにあるものを使って電池を作るというものであった。実験室に入って目に入ってきたのは、生徒たちが作ったオリジナルの電池の数々だった。私はその中でも、「コーヒー電池」を作った班が気に入り、その班の学びの姿を追うことにした。今回は学び合う環境の提案として、50分の授業の中で発表する時間を2回設けられていた。各班男女混合の4人で構成されており、男女2人のペアを2組つくっていた。2回の発表のうち1回は自分の班の電池を他の班の2人に発表し、もう1回は他の班の発表の聞き手になるというものであった。このローテーションした班は4人で構成され、小グループでの発表となった。コーヒーにどのようにして電流を流すのか見ていると、最初に取り出したのはコーヒーではなくお湯だった。思わず「え!!コーヒーは?」と生徒に尋ねると、「お湯に色付けするために入れます。」と言ってお湯の中にブラックコーヒーを入れ出した。見た目はまさにコーヒーだった。コーヒーだから次に砂糖でも溶かすのだろうかと思っていると、生徒たちは砂糖ではなく、食塩と硝酸カリウムを溶かし出した。「なぜブラックコーヒーなの?」「なぜ普通の水ではなくお湯なの?」「何で食塩と硝酸カリウム両方入れないといけないの?」と私自身の中でも疑問が生まれていた。私は理科が専門という

こともあり、生徒の発表を聞きながら、その現象を理解しようと必死に考えていた。すると、コーヒー電池の発表を聞いていた生徒から「それだったらコーヒーを入れる必要はあるのか?」という本質に迫る質問が投げかけられた。その質問に対し、発表者の生徒は「コーヒーでも電池になるということに意味があるのだ。」と返した。私たち理科の教師からすれば、お湯をコーヒーで色付けし、その中に食塩と硝酸カリウムを入れたものは、もはやコーヒーではないと思ってしまう。しかし、この電池を作った生徒たちは、コーヒーに何とかして電流を流すことそのものに夢があり、価値があるのだと感じていた。私はこの言葉を聞いた時にはっとした。この生徒たちの学ぶ意欲は、コーヒーにも電流が流れるのだということを実証したいという強い信念から生じていた。そして「不可能」を「可能」にすることが理科の楽しさの一つであるということを教えられた瞬間でもあった。自分のやりたいことを実現することで、生徒たちが生き生きしていくのが分かった。なぜ理科の教員になったのか私自身見つめ直す機会となった。今回丸岡南中学校が提案した学ぶ環境は生徒たちにとっても良いものになっており、聞き手から出てくる本質に迫る質問や、自分のやってきたことを丁寧に説明する発表者の姿は本当に素晴らしかった。授業が終わっても議論を続ける生徒たちの姿がこの授業の素晴らしさを物語っていた。参観していてこんなにも生徒と一緒に頭を働かせる授業に初めて出会った。今回学んだことを生かし、理科の面白さを伝えていくことができる教師になりたいと改めて思った。

## 他校の実践と研究から学ぶことの意味

10月合同カンファレンスオリエンテーションより

福井大学教職大学院 川上 純朗

ストレートマスターコースの人は経験が少ないかもしれませんが、スクールリーダーコースの先生方は経験があると思いますので質問します。これまでにどのような状況の時、他校の研究会へ参加しましたか。私の場合は、自分の専門教科の研究会、あるいは自分の学校の研究テーマに近い研究会のどちらかに限られていました。前者は、明日からの授業の、後者は明日からの研究のヒントが欲しくての参加です。しかし、ほとんどの場合、明日役立つ情報を得ることはできませんでした。ガッカリして帰ることが多かったように記憶しています。なぜそう感じたのでしょうか、改めて考えて見ます。

自分の実践と関係が強い研究会であればあるほど自分の経験や学んできたことと重なることが多くあります。人は前提として共有していることは、多少の違いがあっても注意して見ることはしません。わかっていること（と思いついでいる部分）には興味がないからです。結果共有していない部分、一般には最終成果のみ目が向くこととなります。木でたとえるなら、最終成果である枝先の花（結論）のみに興味が集中します。その花を自分の木の枝先に付けてみようとするがどうもしっくりこない。考えてみれば当然ですね。木の性質（子どもの実態）、木が生えている環境（学校の実態）や木が育った生育過程（研究の過程・歴史）が違えば、異なった花が咲くのは当然です。しかしそのことに気付いていなかった私は、帰校後必ずこのように言っていました。研究成果が優れていると感じた場合、「あの学校やからできたことで、本校ではとてもまねできんわ」、あるいは研究成果があまり優れていないと感じた場合、「たいしたことないわ、参考にするものはなにもないわ」、と。

縁あってここ福井大学大学院に勤めるようになり、他校種や他教科の授業参観や授業研究会に参加する機会をいただくようになりました。当初は、自分がこれまで歩んできた職歴と共通項目の少ない校種や教科での授業参観にどれだけの意味があるのだろうか、そしてそこで自分が何

ができるのだろうかという疑問や不安がいっぱいでした。しかしある小学校での授業参観の際、「おもしろい」と思った瞬間、児童からの歓声が聞こえてきて「はっ」としました。その授業を児童の立場で見ていた自分を発見したのです。

誰でも教師であるなら、児童生徒が目を輝かせて活発に活動し「楽しかった」「よくわかった」と言わせる授業をしたいと願っています。しかし専門教科の場合は、何を学ばせたいかといった授業者側からのストーリーづくりが優先してしまい、何を学びたいかといった児童生徒側の視点が忘れ去られていなかったか、ということに気付いた瞬間です。

このように自分の職歴と共通項目が少なければ少ないほど、教育の原点から、あるいは自分の教師生活の原点からさらに自分の教育観の原点から自分の実践を振り返る機会を与えてくれることが分かったのです。

先日10月8日には、附属特別支援学校の公開研究会に参加しました。参加理由は、たまたまその日が空いていたこととストレートマスター1年のSさんがよく木曜カンファレンスで報告してくれる「牛乳がなかなか飲めない担当のNさん」はどんな子だろうといった軽い好奇心からでした。通常学校に勤務している場合はなかなか特別支援学校の研究会に参加することはありません。学ばせてもらおうというより知らない世界をのぞきたいといった興味半分の参加理由でした。中学年の部の授業参観をさせていただきました。当初は6人の生徒が3人の先生の指導のもと、牛乳パックの紙から繊維をほぐして紙漉をする作業が淡々と続けました。生徒はほとんど発言しなかったり、先生も必要以外の支援や言葉かけを行わず淡々と時間だけが過ぎていくといった変化の乏しい展開でした。ぼんやり眺めているうちにこの子たちがこの時間一杯飽きずによく作業を続けるなどということに気づきました。さらに淡々と単調な作業が続くので、暇つぶしに指導案眺めてみました。するとそこにはひとりひとりの「これまでの経過

と予想される活動」「教師の思いや期待する姿」「(そのための) 環境設定」が事細かに記述されていたのです。ひとり一人の子どものこれまでの歩みを分析し、その子が最大限能力を伸ばすためにどのような環境を提供すればよいのか、その結果この授業を通して何を獲得してもらいたいのかが克明に記されていました。今、目の前で展開されている淡々とした作業を作り上げていた前提には、これまでの教師の生徒理解に関する確実な観察眼と一歩ずつでも成長してほしいと願う愛情があったことに気付かされました。そして、フッと評価のことが頭の中に浮かびました。現在行われている目標を準拠とした評価(いわゆる絶対評価)についてです。これまで、絶対評価について導入の段階からずいぶん研究してきましたが、結果的に相対評価とどう違うのか漠然とした疑問を持っていました。しかしよくよく考えてみると、目標を準拠とした評価とは、目の前にいる集団の子どもたちをこのような手立てで授業を展開すると、通常の児童生徒はこのような行動の変容が見られるであろうということを前提にしています。すなわち評価基準が普通の児童生徒を基準として作られている以上、相対評価と結果大差ないのは当然だ、ということに初めて気付いたのです。そして本当に大切な評価とは、個性の違いひとり一人の児童生徒に対する個別の目標に対し、それぞれがどう行動の変容が見られたのかを測定する個人評価であると思ったわけです。これが正しいのか否かは分かりませんが、特別支援の授業参観をして評価の本来の意味に気付いたことは自分でも意外でした。

もう一つ大きな学びがあったのは、特別支援教育の在り方そのものです。恥ずかしながら私は今まで特別支援教育は、障害を克服することに主眼点をおいたいわゆるリハビリ的学習を進めているものと思っていました。ところが実際には、ICF(2001年にWHO(世界保健機関)が提唱した、国際生活機能分類 International Classification of Functioning, Disability and Health の略)の考え方のとおり構築されていたのです。即ち、障害を個人の問題とするのではなく環境との関係ととらえ、本人の活動や社会参加に+に作用する促進因子を見つけ出し、本人の活動への参加や意欲を高めることによりその子の成長を支援していくという考え方で学習が構成されているということです。

これまで私は、できないことを見つけ出しできるようにしてあげることが教師の仕事と勘違いしていなかったか、児童生徒のできないことばかりに目を向けていなかったか…。これまでの恥ずかしい実践の思い出が走馬燈のように頭の中を駆け巡りました。

このように私は、今回特別支援の研究会に参加して、特別支援教育とは直接リンクしていない評価の在り方と教師の仕事の原点を学んだように思います。多忙な中、なかなか他校種や自分との共通項目の少ない研究会に参加する機会は持てないとは思いますが、少なくとも大学院に在籍している間にでも参加してみたいかと思いますが。きっとあなたの今後の教育活動の根幹(幹の部分)に大きな影響を与える発見があると思います。



## 小特集 02 :

## 福井大学教職大学院の取り組みに寄せて

## 広島大学教育学研究科共同研究チームの福井大学教職大学院ヒアリングより

夏から秋にかけて、福井大学教職大学には教師教育改革とその実践にかかわる調査チームの訪問が相次ぎました。教師教育改革の実践と議論をさらに前進させるためにも、こうした実践交流の機会を大切にしていきたいと思います。今回、広島大学教育学研究科共同研究「小中高教員養成の担者に求められる資質・能力の開発に関する研究」チームの吉田先生と曾余田先生に福井大学での聞き取りを踏まえた考察を寄せていただきました。

## 実践しつつ実践を問い返す学習過程をつくるために

吉田 成章

今回の訪問で抱いた率直な感想は、「すごい！いいな」と「これは真似できない」という二つでした。忙しい中、丁寧に対応して下さったご恩に少しでもお応えできればと思い、率直な感想をもう少し具体的に述べてみたいと思います。おそらく、福井大学の関係者やこれをお読みの方にとっては当たり前のことかもしれませんが、その点をご容赦下さい。なお、今回の我々の訪問の背景には、広島大学教育学研究科における共同研究「小中高教員養成の担者に求められる資質・能力の開発に関する研究」という研究関心があります。教員養成を担当する大学教員に求められる資質に関して、①そもそも教員養成のあり方をどう構想するか、②これから大学教員となる大学院生をどう養成するか、③そのための大学授業をどう考えるか、の三つの柱から共同研究を行っています。この関心に沿って、以下に感想をまとめさせていただきます。

## (1) 福井における教員養成・採用・研修の特色

福井県では教員採用は小中高一括である、ということにまず驚きました。教員免許更新制なども活用しながら、「福井の教員は何らかの形で、福井大学の教職大学院を通過している」状態を目指すという理念はよくわかりますし、教育委員会と大学との協力体制のもとで大きな見通しと具体的な活動によって教育を変えていくという考え方には感動もしました。また逆に、これだけの構想を描くにはかなりの助走期間と、しっかりとした理論的・思想的基盤が必要だと感じました。福井大学では、大学の研究者が執筆してきた研究蓄積を集約し、教職大学院の具体的構想へと昇華してきたと聞いて、納得しましたし、そう簡単に真似できるものではないと感じました。行政改革や制度設計、予算措置といった面だけではなく、研究者が研究成果を持ち寄って、安易な合意を終着点としない様子が伝わってきましたし、まずは研究者が研究者としてそれぞれの成果をつきあわせ、教員養成・教育の方向性を構想していく必要性を感じました。

## (2) 福井大学教職大学院における研究と教育のはしご役

拠点校での実習を基盤に、週に一度は全員（院生も大学教員も）が集まって、実践を文章化しながら検討する会を設ける。実践の記録をもとに、論文をまとめる。時間の取り方、全員が集まって話しをするための空間の配置など、羨ましいと思う点が多々ありました。特に参考になった点は、院生と教員との間に機関研究員の方がおり、院生指導にとっても、また若い機関研究員自身が研究者となっていくためのステップとしても、いい体制が築けているように思えた点です。どのような文献をもとに理論的な学習を進めるのか、自らの実践の意味をどのように提案するのか、さらにそれらを合わせて実践をどのように省察して明日の実践につなげていくのかという大学院生の学びにとって、あらゆる面で機関研究員が重要な役割を果たしているように思いました。自分も含めて、若い研究者

志望者に、まずは自分の足下（所属大学）の教員養成のあり方を見つめさせる重要性を感じました。

### （3）福井大学教職大学院における教育の魅力

私自身は教育方法を専門にしておりますので、具体的な教育実践を持ち寄ってのカンファレンスに最も興味を持って訪問しました。正直に言えば、わずか数時間の訪問では、丁寧な説明と多くの情報をいただいたとはいえ、実際のカンファレンスの様子を見てみないとその具体的な意義はわかりません。しかしそれでも、大学教員の教員養成への関わり方が、1コマ分の講義ノートを作成してそれを前で読む *Vorlesung* という講義だけでは成り立たないということは十分伝わってきました。もちろん福井大学にも講義スタイルの授業もあるでしょうし、私自身も「講義」を否定するつもりは毛頭ありませんが、教職大学院で教員養成をする際のカンファレンスのあり方をいただいた情報からイメージすると、研究者養成としての各研究室・ゼミ単位での演習が思い浮かびました。単なる実践情報の共有や励まし合い、指導教員の話聞く時間であるというのではなく、自分たちの研究を自分たちで組み立てながら、ほとんどが「失敗」していつている姿が思い浮かびました。大学院生の研究成果のいくつかを見させていただきましたが、それは研究・実践の「成功した成果」というよりも、どこに悩み・つまずきながら実践を進めている過程だと思いました。このような学習過程をつくりだすための大学教員の関わり方や授業構想のあり方を、是非今後とも学ばせていただければと思います。また逆に、福井大学の関係者の方に広島大学にお越しいただき、研究・教育交流ができればと夢をふくらませております。

## 「ともに学習者である」

曾余田 浩史

私たちの今回の訪問の‘オモテの’研究関心については吉田先生にお任せして、ここでは私自身の教育経営学的な関心から感想を書きたいと思います。

2000～2003年に日本教育経営学会・研究推進委員会の一員として、学校現場と研究コミュニティ（大学・学会）との新しい関係性を探ろうと「学校経営研究における臨床的アプローチの構築」というテーマに取り組みました（小野・淵上・浜田・曾余田編『学校経営研究における臨床的アプローチの構築』北大路書房、2004）。その際、私は、経営学者の野中郁次郎の知識創造経営の理論を手がかりに、臨床的アプローチの枠組みを図のように描きました。従来の学校経営研究は、研究コミュニティで形式知を創造し、それを（学校の文脈や文化等の暗黙知を無視して）モノローグ的に学校現場に適用するという発想でした。これに対し、臨床的アプローチは、研究者が個々の学校現場とかかわり、①学校現場のなかで、②研究コミュニティのなかで、③学校現場と研究コミュニティの間で、暗黙知と形式知の相互循環を生み出し、学校が自力で診断・改善する力（組織学習の力）を高めるよう支援するとともに、実践的有効性の高い形式知を創造するという構想でした。

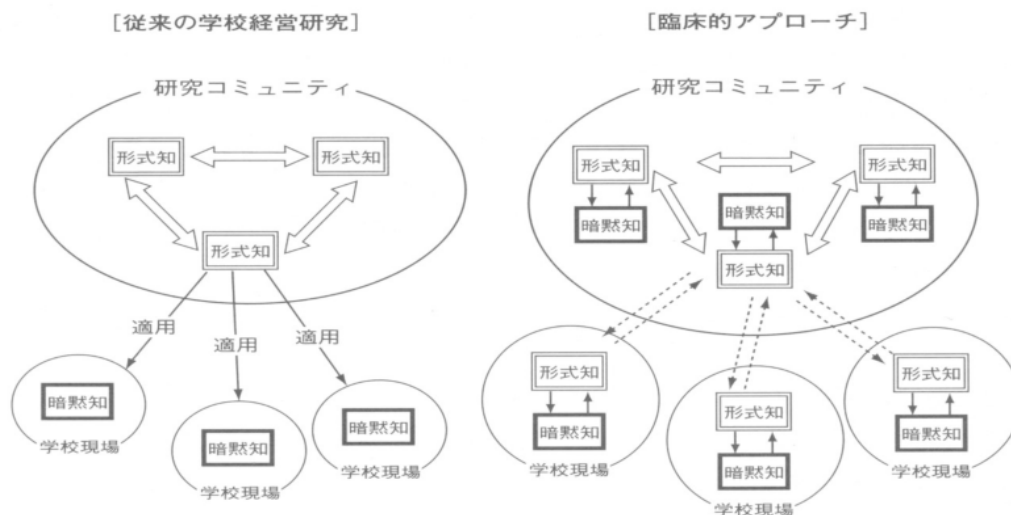
それ以降、臨床的アプローチの重要性は、ますます高まっているように思います。私自身も、学校組織マネジメント研修や学校評価のコンサルテーションなどを通して学校とかかわる機会が多くなり、組織学習をどうとらえて、どう促進していくかということについて考えています。その過程で福井大学の実践に興味を惹かれ、2006年のラウンドテーブルに参加し、このたび2回目の訪問が叶いました。

今回もとても感銘を受けたことは、御多忙であるにもかかわらず先生方が私たちのために時間をとっていただいたうえに、へんな？質問をする私たちに真摯に向き合ってくださいましたこと。「語る」「傾聴」「学び合う」の前提なのではないでしょうか、私たちに向き合ってください先生方の姿が強く印象に残りました。そこから実践コミュニティの

有り様を垣間見ることができました。

もうひとつ印象に残ったのは、学習観の転換とその展開のシンプルさです。経営学的に言えば、近年、科学的・管理法的な発想が強まり、断片化された知識を消化するだけの加算的・累積的な学習観が学校現場や大学を席卷しています。これに対し福井大学は、事例研究を架け橋とした暗黙知と形式知の相互循環＝省察的・探求的な学習観に立ち、その学習を校内研修、学部や教職大学院の教育・研究だけでなく、免許更新制にまで展開しています。さまざまな取組をされているのですが、学習観について軸があるのでとてもシンプルに見えます。マスメディアや行政を通じて知らされる福井大学の教職大学院は学校現場と大学との連携の仕方がクローズアップされているように思います。しかし、その本質は、学習者である現場の先生方の立場に立ったカリキュラムと学習観の転換にあると感じました。しかも、学習観の転換については、現場の先生方と福井大学の先生方が「ともに学習者である」というスタンスを実践しておられることが核心である、と受け取りました。

このような福井大学のユニークな実践に触れて、あらためて自分たちのめざす臨床的アプローチや組織学習のミッションやビジョンが、今までよりも一歩クリアになった気がします。今度は情報や知恵をいただくだけでなく、私たちの実践もお話して、ともに学び合える機会がもてることを楽しみにしております。



この夏から秋にかけて、私立大学協会・上越教育大学・大阪教育大学・福島大学・広島大学はじめ多くの大学から、それぞれ教師教育改革にかかわる調査チームが福井大学教職大学院を訪れています。こうした実践交流・研究交流の場を発展的に編成していけたらと思います。ラウンドテーブルがそうした機会の一つですが、新しい形もまた必要かもしれません。(Y)

# 学校紹介：

## 小浜市立西津小学校

スクールリーダー養成コース 勝見 浩文

本校は小浜市の北部海岸近くに位置し、全校児童数は149名、全学年1クラス市内では中規模の小学校です。

地域では古くから漁業や若狭塗箸の生産が盛んに行われています。8月4日の「はしの日」には、箸会館を中心に箸祭りが行われ、たくさんのひとでにぎわいます。また、NHKの朝の連続テレビ「ちりとてちん」の舞台にもなったところでもあり、エキストラとしてテレビ出演した子どもたちもいました。

特色ある学校行事として、海に近い学校らしく、7月には



遠泳大会

遠泳大会が校区にある川西海岸で行われています(小浜市では海の近くの小学校は遠泳大会を実施しています)。遠泳大会では5年生が400mに、6年生が800mに挑戦します。西津小学校では6月にはい

ると水泳学習をはじめ、この大会に向けた練習を体育の時間を中心に行います。練習の成果もあって、今年も全員完泳することができました。また、海での練習や大会当日にはPTAや地域の方々、小浜市水泳協会や県立大学のライフセービング部などたくさんの方が協力をしてくださいます。地域の方々の多くは、本校の教育活動をよく理解し、協力的です。高齢者の方々による学校生活支援のボランティア活動も盛んに行われています。

本校の研究について、昨年度までは「確かな読みをもとにした表現力の育成」をテーマに国語科を中心に研究と実践を行ってきました。本年度から、文部科学省の「人権教育研究指定校」となり、研究主題を「自他を尊重し、ともに高め合う児童の育成」として、研究実践を進めています。研究組織としては「授業・学級集団づくり部」「仲間づくり部」「つながり部」の3つの部会があります。これら3つの部会を中心に全職員が協働して実践に当たるようにしています。まだ研究を始めたばかりではありますが、この半年間の具体的な取組を紹介します。

「授業・学級集団づくり部」

授業では、人権尊重の精神をはじめとする児童の意識に深

い関わりを持つ、道徳教育の充実の図ることで、一人一人の人権感覚が育成できるであろうと考え、道徳を中心に授業研究会を行っています。また、昨年度までの

国語科の研究を生かして、授業の中で、話し合い、聞きあう活動を取り入れることや、体験活動や他の教科での学習と組み合わせた、いわゆるユニットを組んで指導することで研究主題に到達すると考え実践中です。

「仲間づくり部」

縦割り班で運動会や遠足などの学校行事に取り組みせたり、行事のない月には、水曜日の昼休みに30分の時間を設け、6年生を中心に縦割り遊びを実施したりしました。10月に行った秋の遠足は「小浜まちなか遠足」として、6年生を中心に計画をたて、小浜市街にある名所や旧跡等を縦割り班ごとに散策しました。また、地域の方や高齢者、外国の方との交流を、各学年で実施しています。

「つながり部会」

学校と保護者や地域との連携を図り、保護者や地域住民の人権意識を高揚するための取組を展開する部会です。

これまで、児童と保護者に人権に関するアンケート調査を行い、その分析した

り、保護者や地域の方に向けて小浜病院の小児科の先生に、ADHDなど障害を持つ子供の実態や接し方について、また、落語家 桂才賀さんを招き「しかること」と「おこること」の違いについて講演したりしていただきました。

来年の10月に研究発表会を開く予定です。ぜひ、たくさんの方に参加していただければと思います。



校舎全景



縦割り遠足

# 若狭町立瓜生小学校

スクールリーダー養成コース 高橋 彰男

瓜生小学校は若狭町の真ん中に位置する小学校で、豊かな自然に囲まれており、全校児童163名、学級数は7（特別支援学級1を含む）、職員は16名（調理員、校務員含む）の小規模校です。

子どもたちは明るく元気な子が多く、昼休みや放課後などには野球やサッカーを楽しむ姿が見られます。本校では縦割り活動に力を入れており、学校でのいろいろな行事や活動の時間に、8つのグループに分かれて取り組むことがよくあります。また、学期に一度は全校児童が体育館に集まり、縦割り班ごとにチームを組んでエンカウンターに関するゲームを行う「ふれあいタイム」も実施されています。その様な取り組みのおかげか、子どもたちはみんな仲が良いようです。

地域の方々も学校教育に関心が深く、学校の畑で何か野菜を作ったり、田で田植えや稲刈りをするとすると、子どもたちのおじいさんやおばあさんがたくさん学校に見え、いろいろと積極的に手伝って下さいます。また、マラソン大会などの学校行事には数多くの保護者の皆さんがボランティアとして、また発表会等には参観者として学校に来られます。

私がそんな瓜生小学校に赴任してきたのは今から6年前。これまで3年生、4年生、3年生、4年生の担任をした後、教務主任として2年間を過ごしてきました。この6年間を振り返ると、今まで勤めた5校の小学校の中で最も、周りの先生方は勿論、保護者や地域の方々からいろんな刺激を受け、考えたり思いを深めたり悩んだりした時期だったように感じられ、あつという間の時間だったような気がします。特にこの2年間は教職大学院に入学させていただき、自分の教員としての23年間の足跡を見つめ直し、今後の自分の教員としての在り方を考える上で、とても重要な時期になりました。

我々教職員はこの職業に就いて、ある程度の年数の間を過ごしていくうちに、自分なりの哲学や思い、授業スタイルを築き上げ、それに従って行動しようとするようになります。それはそれで教員として自分の色を付けていくという意味において大切なことだとも思いますが、ややもするとそれに頼ってしまって、学校という組織の中で、自分なりの価値判断にのみ従って行動するようになり、そのために学校は組織としての機能を十分に果たせなくなってしまうことがあるように思います。

私は今、担任という立場を離れ、教務主任という立場か

らそれぞれの立場にいる先生方の思いをできる限り尊重しながら、校長の目指す学校づくりの実現に向けて、微力ながら努力しています。そしてそれは言ってみれば、校長の理想とする学校づくりを進めることと同時に、各職員にとってもまたそれぞれの目指すべき理想の学校像を実現させていくことと結びつくようにするべく調整していくことであり、それはまた、どうしたらみんなが働きやすい、そして自分の子どもを行かせたい学校を創っていただけるかということに通じると考えます。

これまでの2年間の取り組みとしては、具体的には次のようなことがあげられます。

まず昨年度は新型インフルエンザの流行がありましたが、この対応をチームを組んで進めていくことで、養護教諭一人に負担がかかるのを防ぎ、学校としての対応を充実させることができました。この取り組みが本校職員における協働について考える一つのきっかけになったような気がします。

次に、研究については全国学力調査の結果をもとに、読解力に重点を置いた授業づくりを研究部というチームが中心になって進めています。これはそれまで1人の研究主任に研究について任せていたのを、複数の構成員による研究部を創設し、その中での話し合いを充実させることで、研究や授業改善を充実させることができたように思います。

さらに、業務改善としては、毎朝行っていた職員朝礼を廃止したり、備品の管理を工夫することで、時間的な余裕を作り、担任の先生方が子どもたちに向き合える時間を確保するとともに、そのためにできた時間（余裕）を使って、自分の思いが自由に話し合える職場を作ることを目指してきました。

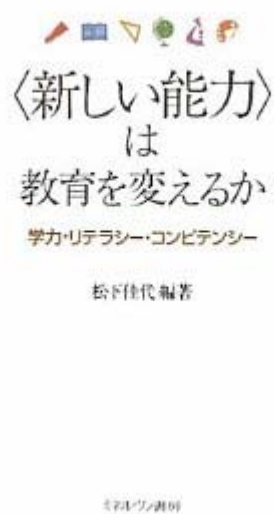
それらの取り組みをもとに職場での私の立ち位置を一言で言うと、管理職と職員を結ぶコーディネーターとしての役割が期待されている場所であると考えます。このような取り組みを進めてはいるものの、現在、学校の何かが変わったというような成果が、表面的に大きく現れてくることは見られません。今は自分の密かな思いの段階に過ぎませんが、いつかそれが職場における本物の「協働」に繋がっていくことを期待して、今日からまた地道な努力を続けていきたいと考えています。

# 本の紹介

## 教育実践と教育改革を考えるために

松下佳代編『新しい能力は教育を変えるか ―学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, 2010. 9.

ユーリア・エンゲストローム著（松下佳代・三輪建二監訳）『変革を生む研修のデザイン―仕事を教える人への活動理論』鳳書房, 2010. 12.



新しい指導要領，そしてそれに対応する指導要録の展開の背後には，国際的な教育改革の展開，そこでの学習観・評価観の大きな転換があります。そうした転換を探る上で重要な手がかりとなる著作が，相次いで刊行されてきています。ここでは二つの本を紹介したいと思います。

一つは，松下佳代編『新しい能力は教育を変えるか ―学力・リテラシー・コンピテンシー』（ミネルヴァ書店, 2010. 9）です。表題・副題にもあるように，進みつつある学習観・評価観・そして能力観の展開を国際的な視野から，また多様なアプローチによって探る論文集です。序章で編者である松下佳代が「新しい能力」概念と教育をめぐって「その背景と系譜」を整理しています。また 5 章では遠藤貴広が日本における PISA の受け止め方を検討する文脈の中で福井大学教育地域科学部附属中学校の

実践と研究を取り上げています。最終章には昨年福井大学教職大学院と至民中学校を訪れたフィンランド・オウル大学のペンティ・ハッカライネンの論稿が収録されています。

もうひとつの本はエンゲストロームの 1990 年代の著作の翻訳です。（ユーリア・エンゲストローム著（松下佳代・三輪建二監訳）『変革を生む研修のデザイン―仕事を教える人への活動理論』鳳書房, 2010. 12）ILO の依頼を受けてまとめられたこの著作は職場での学習をどのように構成していくか，そのための理論的・実践的なガイドブックという性格を帯びています。エンゲストローム自身がかかわってきた職場での学習の取り組みが反映した著作であり，そこでの学習のデザインが明確に提起されています。

探求的な学習をどのように実現していくのか，そして職場での職業人としての学習をどのように構成していくのか，そのためのガイドブックともなっています。学習観の転換，そこでの学習の実際を探る上で具体的な手がかりを与えてくれます。教育改革と教育実践を考えるためにぜひ検討しておきたい二冊です。（Y）



# 実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:  
Spring Sessions  
For Reflective Practice  
And Organizational Learning  
in University of Fukui*

*For Communities of Practice and Reflection*

専門職として学び合うコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2011  
2/26(sat) 12:40-17:50

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011

2/27(sun) 8:30-14:00  
福井大学教育地域科学部 1号館

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2011.2.26-27

福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

参加申し込みについて

- 申し込みの詳しい方法については福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/>をご覧ください。  
(受付はホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は1月15日から2月17日を予定しています。)
- 2/27のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

designed by Fukuikoubou ver.2.0 2010.12.28

# schedule

## 2010/

12/24(木)-26(土) 教職大学院 冬期集中講座 cycle1

## 2011/

1/4(火)-6(木) 教職大学院 冬期集中講座 cycle2

1/31(月) 長期実践研究報告書 締め切り

2/26(土)-27(日)

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011



### 平成 23 年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻 (教職大学院) 学生募集 スケジュール

- 出願期間 平成 23 年 1 月 11 日(火)～14 日(金)
- ガイダンス 平成 23 年 1 月 22 日(土)
- 選抜期日 平成 23 年 2 月 5 日(土)
- 合格者発表 平成 23 年 2 月 15 日(火)
- 入学手続 平成 23 年 3 月 23 日(水)～25 日(金)

問い合わせ先: 福井大学学務部入試課

[ 本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/> ]

### [編集後記]

27 号をお届けします。編集作業が遅れ、発行が年末にまですれ込んでしまいました、とりわけ 早い時期に原稿を寄せていただいたみなさんにお詫びいたします (Y)

教職大学院 Newsletter No.27  
2010.12.25 発行

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp